

「女性史からみた岩国米軍基地—広島湾の軍事化と性暴力」韓国語版の出版にあたって

韓国語版 序文

藤目ゆき

梁東淑氏のご尽力で、拙著の韓国語版が出版されることになり、とても嬉しい。韓国で私が岩国について報告するチャンスがあったのはこれまで一度だけである。それは 2011 年 12 月、「慰安婦」ハルモニたちの水曜行動が 1000 回目を数えた直後にソウルで開かれた「米軍と性暴力」に関する日韓共催のシンポジウムであった。その会場で韓国挺身隊問題対策協議会の尹美香氏が 1000 回目の水曜行動で基地村のオンニからも連帯発言が行われたことを報告された。「慰安婦」ハルモニたちと「基地村」のオンニたちが温かい絆を築いてきたことに感激で胸が熱くなり、心の中で氷が溶けるような気がしたことを思い出す。そのシンポジウムで私は 20 分ほど岩国について報告をした。日本でさえほとんど知られていない岩国の状況に韓国の方たちが真剣に耳を傾けて下さったのはありがたいことだった。そしてこの度、拙著の訳書が出版されることになった。梁東淑氏とノンヒョン出版に心から感謝している。

自分の本の翻訳書が読んでもらえるのは、どこの国であっても嬉しいことに違いない。だが、韓国でこの本が出版されて嬉しいのは特別に理由がある。

ひとつの理由は、岩国には朝鮮半島と直結する近現代史があり、日米韓軍事同盟体制の要たる岩国は日本と朝鮮半島の現代史を集約的に表現しているからである。私は岩国を呉や広島、江田島をもふくむ「広島湾」地域の一部ととらえているのだが、この地域は近代日本において広島市に第五師団、呉の鎮守府と海軍工廠と軍港、江田島の海軍兵学校が設けられ、高度に軍事が集中した地域であった。そもそも首都東京以外で大本営が置かれたのは——戦争末期の松代大本営という幻を除けば——広島のみであり、それは広島が朝鮮半島の甲午農民戦争に対する干渉と侵略の戦争——日本の歴史教育では朝鮮半島の存在が反映することのない呼称「日清戦争」と教えられるのだが——に対する出撃拠点として地政学的に意味があったからであった。近代日本の朝鮮侵略と結びついて朝鮮半島に近いという地政学が広島湾地域の高度な軍事化を促したのである。

岩国が今日のように沖縄の嘉手納基地をもしのぐ巨大な基地へと増強されるにいたる契機になったのは朝鮮戦争であった。米国は朝鮮戦争後も岩国が朝鮮半島への出撃にすこぶる有利な至近距離にあることから岩国基地を手放そうとしなかった。その結果、本州の他の基地施設の多くが日本側へ返還されていったのと対象的に、岩国基地は拡張と増強の一途を歩まされてきた。岩国基地は常に朝鮮有事に即応可能な基地として強化されてきたのである。朝鮮戦争中、捕虜となり「自分は米空軍パイロットとして岩国基地で細菌戦争に

関する抗議を受けた後、群山に移動し、細菌兵器を散布した」と告白した米軍人もいた。米国政府はこうした捕虜の証言は強制による虚偽だと言い続けてきたが、細菌戦疑惑に対する反証は依然として説得力があるとは言いがたい。朝鮮戦争やベトナム戦争にナパーム弾や枯れ葉剤その他の非人道兵器 — 兵器に人道的なものがあるかどうかは疑問だが — を積載して米軍機が飛びたったのも岩国基地だし、ベトナム戦争が終わった後も、チーム・スピリットやその他の米韓合同軍事演習に米兵が出発していったのも岩国基地であった。

このように朝鮮半島への侵略と干渉に結びついて拡張され続けてきた岩国基地について、私は本書でその近傍で生きた人々、いまも生きている人々のことを取り上げた。もともと岩国は平地が少なく岩山が多いので「岩の国」と名付けられたような土地である。とくに川下は何百年もかけて民衆が河口を埋め立てて干拓し、土地を広げて農地を作ってきた。日本軍が飛行場を作るまでの岩国は、瀬戸内海の豊かな藻場に恵まれ、漁業や畑作が人々のなりわいとなる平穏な土地で、今も老人たちはかつて瀬戸内海で潮干狩りをしたり、瀬戸内海に流れ込む川で水泳をした少年時代を懐かしむ。が、呉や広島や江田島を補う軍事的役割を背負わされて軍都となった戦時下には、朝鮮人をふくむ多数の岩国住民が報復攻撃で命を落とした。その戦争が終わってからも、米軍の朝鮮戦争出撃によって、岩国の人々は今日に続く苦難を背負わされるのである。私は、岩国の朝鮮人たち、土地を奪われた農民たち、「基地村」で米兵を相手にした娼婦たち、米兵がらみの犯罪で殺された女性たち、性暴力にさらされた大人の女性たちや少女たちのこと、そして、平和な生活を願う米軍基地の暴力と闘った人々、そして今も闘っている人々について書いた。朝鮮半島の侵略と殺戮のために建設され拡張してきた岩国の基地が基地近傍に生きる人々の平和に安心して暮らしたいという願いをふみにじり、複合差別を強め、人権を侵害することによって存続してきた。それらを私は韓国の人たちにお知らせしたい。

韓国での出版が特別に嬉しいもう一つ理由は、この本が、日本軍「慰安婦」問題と基地問題、女性人権と外国軍駐留に関する韓国の人々の運動に私が感銘を受け、励まされ、学んできた成果でもあるからだ。

1992年の尹今伊氏殺害事件を受けて、米軍犯罪根絶運動や基地村女性を支援する活動が韓国で展開していると知ったことを契機に、私は基地周囲の女性史を本格的に調査し始めた。過酷な人生を生きた基地村のオンニたちによりそう韓国の人権活動に感動し、日本ではどうだったのだろうと調査を始めてみると、日本の基地周辺にも性売買の歴史と凶悪な米軍犯罪史が綴られ、多数の女性が性暴力被害に遭ってきたことが次々に分かってきた。岩国では女性殺害事件も起きていた。下腹部にドライバーやハンマーを刺された死体で見つかった女性もいれば、乳房と性器を切除された死体が遺棄されていた女性もいた。ベトナム戦争後も米軍人による殺人事件は相次いだ。だがこれらは地元の新聞に記事が載りこそすれ全国的な報道はなく、女性運動や平和運動で岩国の女性たちの受難が語られることもなかった。55年に沖縄で惨殺された永山由美子ちゃんの名前が沖縄の人々の心に刻印され、92年の尹今伊氏の死が韓国反基地闘争の中で深く記憶されたのとはちがひ、日本「本土」の平和運動や女性運動においては、地続きの岩国で殺された女性たちの存在は記憶されるどころか、まるで何事もなかったかのように知られてさえいないのである。

基地村の女性たちのことをもっと知りたいと願い、私は仲間とともに2001年に「軍事

基地と女性」ネットワークをつくり、岩国をはじめ、沖縄や三沢基地（青森県）、演習場のある王城寺原（宮城県）、日出生台（大分県）といった本州諸地域の女性史の調査をはじめ、また、平澤や議政府、東豆川などを訪ねて基地村を見学し、人権団体の方々の話を聴いたり、報告書を読んだりした。05年には大阪外国語大学（現 阪大学大学外国語学部）でトゥレバンが製作した映画『フクロウと私』を上映し、事務局長の鄭ヘジン氏を招いて講演会を開いた。そんな取り組みによって私は韓国では基地村のオンニを支える活動にふれ、基地村における国家的性搾取を批判しオンニたちへの補償を求める運動も始まっていることも知った。ある活動者が、基地村のオンニたちの人生は恥ずかしいものではないと語り、「オンニたちは世の中の最も底辺で働いてこられた。だからこそオンニたちには世の中を根底から変える力がある」とオンニたちへの尊敬をこめておっしゃった言葉は今も私の心に残る。

ひるがえって日本社会では、基地村の性売買に携わった女性はトラブルメーカーと見なされ、殺されてさえ被害者だと認められなかったのが実状である。性売買従事者でない女性が米兵による性暴力被害を受けても、非難されるのは被害者のほうである。被害者パッシングは被害者が少女であってさえ嵐のように巻き起こる。そんな事態は日本社会における女性人権の水準の低劣さを示しているのであり、こうした女性抑圧性は、米軍基地問題を見る日本人の目を曇らせ、また、「慰安婦」ハルモニへの日本政府による国家補償の履行を妨げる大きな要素にもなってきた。どんなに嘆いても嘆き足りない。心も凍りつく。基地問題を女性の視点から見ようとする時に日本国内の状況はそんなふうには寒々しかったが、私が「基地と女性」というテーマに取り組み続けることができたのは、韓国の「慰安婦」ハルモニと基地村のオンニたちの間に結ばれている思いやりの絆、ハルモニやオンニたちと支援者たちが築いてきた信頼の絆、社会運動や学術交流を通して生まれた日韓の友情の絆に魂を救われ、心があたためられ、勇気づけられてきたからだったと思う。

終わりに、本書脱稿後の2年余りの岩国についても言及しておきたい。

岩国では、空母艦載機 59 機を岩国に移駐し愛宕山に米軍住宅を建設しようとする国に対して、市民たちの苦闘が続いている。基地を巡る裁判が何件も係争中であり、愛宕山住民は「愛宕山見守りの集い」と名づけられた定期的な座り込みを行っている。10年9月には愛宕山を守る会の会員で地区の自治会長だった老人を軍属女性が車でひき殺した。米軍側がこれを公務中の事故と主張したため事件は不起訴とされ、被害者遺族が検察審査会へ2度も審査請求を行ったが不起訴は覆らなかった。現在は民事訴訟が係争中である。昨12年の夏から秋にかけてはオスプレイをめぐる、普天間基地配備と岩国基地への分遣隊配備に反対する集会や岩国への搬入強行に対するハンガーストなどの抗議行動が行われた。昨12年末の総選挙の結果、元「慰安婦」の強制性を否認するような暴言で国際的に有名な、また核武装や憲法改悪を推進する強硬派である安倍首相の政権が誕生し、さっそく F35 ステルス戦闘機の岩国配備が決められた。人権が尊重される平和な社会、戦争と基地のない世界を願う人々にとって、これはまさに凍てつくような寒々とした政治情勢である。それでも岩国では元旦から住民と支援者たちが「見守りの集い」に集まって、「どんなに厚い雲の上にも青空が広がっている。皆でがんばりましょう！」と誓い合った。

厚い暗い雲のたれこめる時代だからこそ、朝鮮半島に深い結びつきのある岩国について

多くの韓国の人々に知ってほしい。そして、韓国と日本、朝鮮半島と岩国の間に 60 年以上強められてきたような軍事的結合でなく、新しい平和のための友情の結びつきが生まれてくれますように。そう祈りながら、この一文を私から韓国の皆さんへのご挨拶とします。

2013 年 1 月 21 日

岩国・愛宕山にて